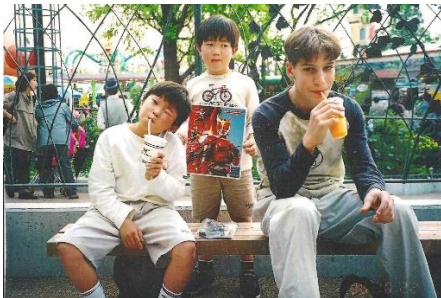


私はこれまでに3回日本を訪問することができ、それぞれの訪問が私の人生に大きな影響を与えました。

一回目は私が15歳の時で、アメリカン・フィールド・サービスによる1年間留学で大阪府枚方市に住む幸運に恵まれました。それは何の誇張もなく、私の人生で最も重要な年でした。アラスカ田舎の小さな町からの私が、それまで見聞きしたものとはこれほど違うコミュニティを想像するのは困難でした。学生、教師、そしてホストファミリーは私を信じられないほどに歓迎してくれました。一年を通じて私は言語、文化、食事、そして友情を吸収しました。それは私の世界の見方を変えました。もちろん、日本について非常に多くのことを学びましたが、同時に米国の外でいかに多くの人々が母国と母国の世界での立ち位置を見ているかということも学びました。アラスカに戻る頃にはそれまでの考えとは一線を画し、国際関係と外交の仕事を追求することを決意していました。



4年後、私は国家安全保障教育プログラムのボレン奨学金で、日本に戻り東京の早稲田大学で1年間勉強することができました。早稲田大学では英語で教えるプログラムを提供しており、そのプログラムで主に経済学と外交政策を勉強しました(正直申し上げて、日本語の大学レベル・コースを受講できるほど私の日本語は堪能ではありませんでした)。この頃まで国際経済政策を中心に国際サービスを専攻しており、米国外務局に入るつもりでした。クラスや柔道クラブの訓練を共にし、交流した日本の大学生がこの時も私の最重要事項でした。賢く、勤勉で、楽しく、魅力的なこれら若者たちを今思い起こしてみると、最も印象に残っているのは彼らが世界で最も大きく最も混んでいて最も圧倒的な都市をすり抜けながら、くつろぎ居心地良さそうに生活していたことです。もちろん、東京は私の懐具合を遥かに超えるものでしたが、私たち貧しい交換留学生は皆、節約しながらの生活の中、クラスや山手線圏内での生活に退屈することはめったにありませんでした。時々、山手線の外を訪れることさえありました。





最後は 2019 年の後半、COVID が世界を襲う直前にアンカレジ姉妹都市委員会代表团は北海道千歳市を訪れ、千歳市の後にアラスカ大学アンカレジ校卒業生モンティ・ディクソンが 2011 年の津波で多くの人々と共に命を落とした陸前高田市を訪れました。これは私にとって最短の日本滞在でしたが、それでもこの経験で私はとても変わったと感じています。以前は学生でしたが今は大人の議員になり、日本の新しい側面を見るようになりました。どちらの都市でも政府関係者、教師、大学教授、事業主などを訪問しましたが、日本の人々はその革新性、回復力、素直な組織力で最も強い感銘を与えてくれました。私は国務省で働くとの考えを棄て国内公共政策に従事して久しくなっていました、その訪問は米国の外にこれほど繁栄し人を夢中にさせてくれる世界があることを、そして、私たちを受入れ歓迎してくれる日本人の思いの強さを思い出させてくれました。それからもう一度、食べ物について触れなければなりません。旅行中、私が好きになれなかった食べ物はひとつもありませんでした。それには数回おやつを買った「コンビニ」も含まれます。学生の頃、お金を少ししか持たなかったのは良いことだったと思います。大人になってさえも、便利な店「コンビニ」で見え触れるもの何でも買って食べたいとの思いを抑えることが難しかったからです。「なつかしい！」との思いで一杯になりました。

これが私の日本の話、少なくともその一部です。ここまで私が言及していないのは米国で出会った日本の人々です。アメリカの大学の交換留学生、アンカレジ訪問の代表团、ここに家を持つ長年の永住者、更にはアラスカの美しさ見に来る観光客も。彼らとのやりとりでネガティブなものは一つも思い当たりません。私はそれらの日本人によって話される日本語を聞くのが大好きです。近代的で、しかも穏やかに変わりつつある、つまり、初めて枚方高校を見て京阪線に乗り、清水寺の小川から水を飲んだ 15 歳の頃の私でも理解できた、永遠に歴史・文化に根ざしながらも穏やかに変わりつつある日本で起こっていることを、日本の人々から聞くのが私は大好きなのです。

